

河陽新聞

熊本市南部地区市民の会
発行責任者 村田幸博

旅する蝶チョウをまねく計画

この秋（10月～11月）、川尻校区の河原や町中で写真の蝶チョウを探してください。



川尻小学校「緑の少年団」は、校区の環境を学んでいます。

今年、南部市民の会の総会で「川尻校区内の自然環境や動植物の勉強会を開いてほしい」と提案がありました。

川尻校区は多くの河川に囲まれ自然豊かな環境に恵まれています。

川にはアユ・ウナギをはじめ多くの魚やエビもいます。また、夏の河原には多くのトンボや蝶チョウが飛び交い、子供たちの自然観察には最適です。

そこで、今年度の企画は「町や川へ蝶チョウと人呼び込むプロジェクト」と題して、川尻小学校「緑の少年団」と、台湾や香港と日本の間を旅する蝶チョウ（左写真）「アサギマダラ」が大好きな植物「フジバカマ」の花の苗を千株つくり、加勢川の河原や商店街で花を咲かせる計画を進めています。「フジバカマ」は万葉集にも詠まれた秋



の七草の一つです。昔から日本人に親しまれて来た植物で、京都ではお香の材料として好まれています。

しかし、今では絶滅危惧種に指定され、かつては日本各地の河原などに群生し、秋には写真のように淡い紫紅色の花を咲かせ、台湾や香港へと旅する蝶チョウ「アサギマダラ」が好んで立ち寄り花の蜜を食します。

旅する蝶チョウと呼ばれる「アサギマダラ」は今謎の多い蝶チョウで春の5月～6月にかけて九州を経由して日本各地の高山で暮らして繁殖をし夏に日本で繁殖した子孫の蝶チョウが、秋には逆に九州を経由し琉球列島や遠く台湾や香港などに渡って行くとの事です。

この秋には上写真の様に、川尻に咲くフジバカマの花に旅する蝶ちょうが立ち寄るのを夢みて活動を展開しています。



川尻小学校では小学4年生のバードウッチングをはじめ、川の観察会や校区内の伝統文化を学ぶ学習が行われています。

バードウッチング（野鳥の観察会）は、例年の2月に行われ、コースは朝から川尻小学校玄関を出発し、加勢川の河原を回って来る2時間コースです。例年20～26種類の鳥が見られます。

川尻校区には大小幾つもの川があり、四季を通じて多くの水鳥が見られます。シベリアや中国大陸から渡って来る冬鳥のカモ類をはじめ、サギ類・シギ類・チドリ類などです。

また、阿蘇外輪や九州山地などから移動して来るウグイス・メジロなどの移動鳥、年中、川尻で暮らすカラスなどの留鳥などが眺められます。

地域の皆さん・おばさんが先生の、菊池林間学校
今年で32年目、川尻青少協活動

川尻校区では川尻小学校4年生を対象に希望者を募り、夏休み期間中の8月をはじめ、菊池少年自然の家を活用し2泊3日の林間学校が毎年開催されています。

今年8月2日～4日に行われました。

今年で32回目となった菊池キャンプは川尻校区青少年健全育成協議会（吉村圭四郎会長）が毎年実施しているもので、地域のおじさん・おばさん、さらに近年は、川尻小学校卒業のお兄さんやお姉さんが指導者の先生役となり、時にきびしく、時には大らかに見守り、



右写真はサギ類を撮ったためらしい写真です。4種のサギが写っています。左から頭の茶髪なアマサギ、2番目は真っ白なシラサギ、3番目で奥に見えるのがゴイサギ、その手前で大きな鳥がアオサギです。アオサギは身長90cm、羽を広げれば大人が腕を広げたぐらいの大きさの鳥です。

このサギのコロニーは県下最大級で、川尻校区に隣接する加勢川下流の六間堰で2～3000羽のサギ類が見れます。さらに、堤防には竹藪も多く残されウグイスやホホジロの鳴き声が聞かれます。また、河尻神宮の森ではフクロウが人気を集めています。

朝は6時超、7時から朝の集いやラジオ体操が行われ、集団生活の中では5分前集合が求められます。食事の際にはルールを守る叱咤激励の指導が繰り返されます。

新聞づくりのスタッフを探しています。

川尻校区の人口は約1万人、3千世帯が暮らしています。ある学者の理論では人間は1万人の顔の識別が出来、1千人の名前を覚える事が出来、毎日、百人の人に会いさつする能力が備わっていると事です。



32年間、一度も休むことなく指導にあたられていた方が2名います。12町内で前会長の玉真勇一さん、5町内で元事務局長の友清秀子さんです。頭が下がります。

このような地域で子供を育てる行為や挨拶運動が、目に見えぬ形で芽が出はじめています。それは、菊池キャンプで育った青年たちが、今、川尻の後継者として頑張りを初めていることです。